

私の父は在日韓国人で、新聞記者でした。そんな父の仕事の関係で、私は二歳から約八年間をブラジルで過ごしました。しかし現在は、こうして日本で過ごしています。今日は、私が日本とブラジルの2カ国で生きてきた中で気づいた、多様性についてのお話をしようと思います。

日本の約 22 倍の面積を持つブラジル。そこで過ごした幼少期、私は息をのむような大自然に囲まれました。地平線まで続く広大な草原には数え切れないほどの牛が放牧され、夏には透き通るような海で小魚を探す週末を過ごしました。この豊かな自然と触れ合った経験が、今の私の感性の土台になっているように感じます。

さらに、ブラジルでの学校生活は、私に「自由」と「個性の尊重」を教えてくださいました。学校の時間は午前か午後かを選ぶことができ、残りの半日は家族と過ごしたり、趣味やスポーツをしたりと、好きなことをして過ごします。学校でうまくいかないことがあっても、そこが世界の全てではないという、大らかな雰囲気がありました。特に印象的だったのは、給食の時間です。ピュッフェ形式のランチタイムでは、何を、どれだけ、どこに誰と座って、いつまでに食べるかも、全てが自由でした。様々な国にルーツをもつ人々が暮らすブラジルでは、宗教の決まりや家庭の習慣もバラバラです。だからこそ、多様性を認め合い、自己管理や自己決定を重んじる教育方針が確立されていたのです。

そんなブラジルから、私は十歳になるタイミングで日本へ帰国しました。日本での暮らしは驚きと発見の連続でした。特にブラジルとの違いを感じたのは運動会などの行事です。自由を重んじていたブラジルと比べると、日本の教育は「協調性」や「規律」を重視しているように感じます。周りと同じ動きをし、決まりを守る空気があるからこそ、全員でやり遂げたときの達成感を分かち合うことができました。そして、頑張りたいと思えるスポーツにも出会い、それを応援してくれる人たちに恵まれて、ブラジルとはまた違った、温かな幸せをたくさん感じるようになりました。

しかし、2つの国で幸せを感じる一方で、私はそれぞれの国が共通して抱える「影」の部分にも触れました。実は、多様性を重んじるブラジルでも、全員が互いを尊重できていたわけではありません。私も人種や見た目に対する差別を受けました。「黄色い肌の子はこの絵本を触っちゃダメだよ。」と言われたり、目が細くて吊り上がっているとからかわれたり……。そして日本でも、同じような経験があったのは残念ながら事実です。例えば、「朴」という苗字をからかうようなことを言われたことが何度かあります。「朴」という苗字は韓国では一般的ですが、馴染みがない人にとっては珍しく思うのでしょうか。名前を見て「韓国人なの？」と聞かれることは今では慣れてしまいましたが、そんなとき本当は、言葉にするには難しい、なんだかもやもやした気持ちを感じます。

多民族国家であるブラジルと、島国である日本。2つの国はそれぞれ正反対とも言える文化を形成していますが、人種や国籍で他者をひとくくりにし、遠ざけようとする部分は共通する課題であると言えます。このように、私は2つの国を経験し、文化や環境が大きく異なっているにもかかわらず、大多数とは違う存在を受け入れることの難しさは同じようにあるのだと分かりました。

多様性が重視されている現代社会においてどのような考え方が必要なのか。それは、生きる国がどこであっても、揺るがない自分のアイデンティティを大切にすること。つまり、「自分は何者か」「自分はどうかりたいか」という主体的な自己認識をしっかりと持つことが必要だということです。私たちはなりたい自分になることができます。それは、他者からの評価によるものでもなく、肌の色や国籍で定められるものでもありません。加えて、「自分」だけでなく、「相手」がどんなアイデンティティを持っているのか。偏見に囚われずひとりの「人間」として知ろうとすることが多様性を認め合うことに繋がると私は思います。そうして築いた相手との関わりは、価値観を広げ、「自分」の人生を楽しくしてくれます。他でもない、自分自身の充実した人生を歩むために。周りの環境や他人の目に振り回されるのではなく、自分で物事を判断し、見極め、自らの信念を持って一步を踏み出していくこと。それこそが、私が2つの国を生きてたどり着いた、最も大切な答えです。